

---

## 北から南から

---

### 栗山赤十字病院(北海道)

#### 桐越義夫

栗山町は夏は緑に囲れ、冬は山の雪景色がとても美しく、病院の窓からは町営スキー場が見られる位置にあります。

栗山町は商業と農業の町で人口15,685人の小さな町ですが、平成7年から町の中心部は、近代化が進められ、すばらしい町に変貌しようとしております。

農業では馬鈴薯の種いもが日本一、ゆりの根は関東・関西へと出荷されております。

緑の美しい御大師山には、北海道でも珍しい植物が生息し、国蝶オオムラサキの生息地として、平成1年には環境庁より小動物生息環境保全地域として指定を受けました。

酒どころ栗山、清酒「北の錦」で知られる小林酒造は北海道の酒蔵の先駆けとして、一世紀以上も前に栗山町に根を下ろし、おいしい味わいの清酒造りをつづけ道民に愛されております。

栗山町は夏と秋に祭りが2回開催され、夏の火祭りには栗山赤十字病院の若い男女職員が、火御輿を担ぎ上げ公園に向い、火祭りが終る頃には地酒「北の錦」を飲みジンギスカン鍋を囲み夜遅くまで交流を深めております。

当院は昭和27年に赤十字病院として開院されました。

現在、職員数232名、病床数255床、診療

科は、内科・外科・整形外科・小児科・精神神経科・耳鼻咽喉科・眼科の7科で診療を行っております。

検査部は技師9名・助手1名のスタッフで活躍致しております。

業務分担は、生化3.5名、血液輸血一般で3名、生理2.5名、細菌1名です。

検査部では“患者のために！”をモットーに、入院では9時までには依頼された検査は中間報告として1時30分までに各病棟へ連絡をしております。

当検査部は2年に1度の保険点数の見直しにより、検体検査は苦しい状況ではありますが、できるだけ院内検査を中心に業務を進めているところです。

これからの当検査部の課題は、採血業務を検討する時期にきているところです。



---

## 北から南から

---

### 浦河赤十字病院(北海道)

穴澤茂樹

浦河町は、軽種馬生産(サラブレッド)と水産資源が豊富な人口1万7千人あまりの町で、日高支庁の所在地でもあります。

5冠馬シンザンの長寿記録でテレビ・新聞などで話題になっている町でもある。

またその周辺には中央で活躍した馬たちが故郷で余生を過ごしており、来道の際には牧場巡りもよろしいかと思えます。

さて当院は昭和14年に日本赤十字社北海道支部浦河診療所として開院され、内科・外科・小児科・産婦人科・耳鼻咽喉科の5科を整えてスタート、ベット数は42床、職員13人という小さな病院でした。

管内では初めてのハイレベルな病院に地域の人達の依存度は高く、1年足らずで地域の人達から拡張の要求が起り、昭和19年に延べ3,410㎡の院舎を新設、82床に増床して再出発、昭和23年に「浦河赤十字病院」と改称した。

昭和27年3月十勝沖地震で病院は大破、恒久的な復旧対策のため同年10月から31年5月まで浦河町に移管して「浦河町立病院」と改称しましたが、31年6月には再び日本赤十字社に移管「浦河赤十字病院」に戻り、昭和32年総合病院の承認、48年には地域センター病院に指定を受け、さらに57年第二次救急病院に指定、時代の流れに先行した医療設備の強化を推進しながら現在15科417床を有し、平成2年4月には看護専門学校を開設する。

医師33名(非常勤9名含む)を中心に職員357名を擁する地域医療の中核となっている。

#### 検査部の構成

部長(内科部長兼務) 1名

技師 8名

助手 1名

厳しい医療環境の中の検査部門ですが、検査拡大業務の一環として、日帰りドックの採血、時差出勤による早朝病棟採血(外科系)10名以内を実施しております。

時間外における緊急検査の対応は電話、ポケベルによる自宅待機者の呼び出し、休日は半日勤務(08:30~12:30)その後は翌朝08:30分まで待機で各診療科に迅速に対応している。

今後の課題として一部システムをトータルシステムの実現にむけて努力しているところです。またランニングコスト、原価意識の高揚を図り支出の削減に努めている。

今秋にも実施が予想される完全週休2日制への体制作りにも取り組んでいかなければならないと思えます。

より一層の検査の質を高め、地域センター病院として、地域住民に信頼される医療をめざして行きたいと思えます。



---

## 北から南から

---

### 秦野赤十字病院(神奈川県)

稲葉宏文

秦野市は神奈川県ほぼ中央に位置し、新宿より小田急線急行で約1時間、小田原より20分の所で丹沢山塊のふところにあり、表丹沢の登山口として昔も今も1年中賑わいを見せています。10数年前までは葉タバコ・落花生等栽培していた純農村地帯であったが、現在は東名インターが出来、又急行の停車駅なので東京・横浜方面のベッドタウンとして次々に住宅が建並び現在も人口が増え続けています。現在秦野市の人口は約17万人。秦野赤十字病院は昭和13年に創設、昭和43年1月現在地に新築移転、56年増改築227床(診療科12科・伝染病棟25床)現在に至る。

外来患者数1日平均670名、職員数235名、検査部のスタッフは12名で男性5名・女性7

名で夜間及び休日は4名で交代オンコールにて対応、採血は外来のみ検査室で技師が交代で行っています。

当初増築した時スペースもゆったりしていると思っていましたが、現在では手狭のため新しい機種の導入もままならず、機能的には数年来変化がありません。

現在平成10年に350床を目標に新築移転計画が進められて、場所敷地等ほぼ決まり建設計画の委員会も4月より発足し、目的に向かって地域医療と高齢化社会により良い医療が出来るように努力致しますので、各赤十字病院諸先生方のお知恵を拝借する事が有ると思っておりますので、その節は宜しく願い申し上げます。

この原稿が活字になる頃には1歩も2歩も前進していればと願っています。



---

## 北から南から

---

### 大阪赤十字病院(大阪府)

大西将則

大阪赤十字病院は明治42年5月8日に大阪支部病院して創立されました。

当院は上町台地と言われる高台にあり、大阪市内でも比較的環境のよいところにあります。

東に金剛、生駒の山なみが展望でき、西には心斎橋・道頓堀・難波とキタに対し、通称ミナミと言われる繁華街が近くににあります。

53,000㎡という広大な敷地を有し、市内の病院としては珍しく緑も多く落ち着いた環境を有しています。

しかし病院の建物は古く、長年の懸案であった病院改築が本年度中に着工され、近い将来新たな装いで目見えすることになります。



施設の概要：病床数 1,136床

(一般1,052・精神84床)

診療科21科を中心に専門分化

付属施設：大阪赤十字看護専門学校

大阪赤十字助産婦学校

大手前整肢学園

つぎに検査部の概況についてすこし触れます。

平成5年度に組織改定がなされ、現在4課12係です。スタッフは部長1・副部長1・薬

剤師2・臨床検査技師51・助手3の58名で構成されています。(病理部は除く)

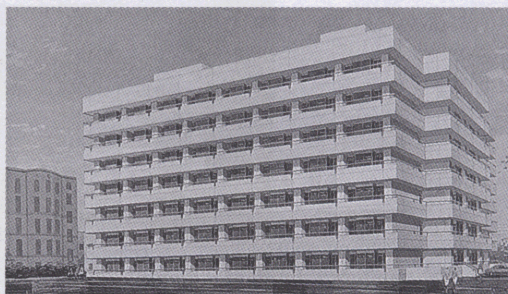
部内の運営は、部長を議長とする管理会議(部長・副部長・技師長・課長で構成、不定期に開催)及び技師長を議長とする運営会議(係長以上の役職で構成、月2回定期的に開催)で行われています。

医療者として各人の資質の向上を図る目的で、学術委員会(委員長として技師長、相談役として部長)が主催する勉強会及び抄読会をそれぞれ月1回定期的に継続しております。その外に各分野で学習会を自主的に設け研鑽に励んでいます。

医療の専門分化が進む中で、臨床検査分野においても同様の傾向が見られ、各学会が認定する専門技師(士)の役割がひろがっています。

当院検査部においても、一級臨床病理技術士(血液学)1名・超音波検査士8名が認定されてまいす。また今回認定輸血検査技師の申請も既に終え年内に1名認定される予定です。

今後の課題として検体検査の自動化、システム化を進める中で検査報告の更なる迅速化、生理検査の予約待ちの解消、項目の拡大によって、診療側のニーズへの対応を進めることで採算効率を上げ、院内における検査部の存在価値を高めていく努力を重ねております。



---

## 北から南から

---

### 小海赤十字病院(長野県)

篠原 幸子

小海<sup>コウミ</sup>町は、長野県の東部、南佐久地域のほぼ中央に位置し、東は佐久町・北相木村、西は八ヶ岳連峰を境に茅野市、南は南相木村・南牧村・北は八千穂村にそれぞれ接しています。町の中央部を南北に流れる千曲川に沿って帯状の平坦地が形成され、ここを国道141号線・JR小海線が走り町の主要交通路となっています。

小海赤十字病院は、昭和29年9月に北牧村六カ村病院財産組合により北牧病院として開設。昭和30年5月、日本赤十字社長野県支部に経営移管。北牧村赤十字病院となり、昭和32年4月に、小海赤十字病院と改称しました。平成元年2月に、検査室・人間ドック室・内視鏡室を建築し、併せて食堂を改築し救急外来処置室・生理検査室を設置しました。周辺1町5カ村で人口は22,000人位ですが、高齢

化は進んでいて65才以上の割合が25%強という中で慢性的な過疎化など、福祉の充実や若者定住の促進など課題も多いです。

検査室スタッフは3名ですが、第二次救急病院として時間外検査はポケットベル体制で対応しています。病院は地域の住民からのニーズにこたえられるように全職員一丸となりがんばっています。在宅医療・訪問看護にも力をいれ、在宅医療スタッフを作り、各職種の人が集まりいろいろなケース検討等をして、介護者もまた介護される方も「良かった」と言われるような医療を提供していきたいと努力しています。

平成8年度は、厚生省の事業である「高齢化地域における介護者支援対策事業」の指定病院としてこの事業が病院にとって大きな力となるように全職員で積極的に活動しているところです。



---

## 北から南から

---

### 豊科赤十字病院(長野県)

山口光雄

豊科町は人口26,912人(平成8年7月1日現在)の町で松本より北方約16Kmのところ、テレビドラマ等で何回か全国放映されましたが、夏山の登山口でもあり(常念岳、蝶ヶ岳、燕岳、槍ヶ岳、上高地方面)ワサビをはじめとして、銘水の郷としての安曇野平野に位置しています。冬期を除いては、安曇野を訪れる人達で連日賑わっています。

当院は昭和26年3月8日、内科・外科・産婦人科、病床35床で産声を上げました。開院当時は四方を田圃に囲まれた農村地帯でしたが、現在は高速道が近くを走り、空には松本空港からとび立つジェット機で昔の面影はなくなりました。開設以来、増改築・増床して、現在診療科目は、内科・神経内科・小児科・外科・整形外科・脳神経外科・産婦人科・眼

科・耳鼻咽喉科・麻酔科・泌尿器科・循環器科で、平成8年2月29日より地域住民の要望に応じて人工透析を15床、特床2床で開始して大変よろこばれています。又、第二次救急指定病院として、訪問看護・薬剤部での院外処方等で地域との結びつきを強くし、検査部も365日24時間体制(休日日直・夜間ポケベル)をとり、病める人のために頑張っております。

[一般病棟350床 全職員347名 検査部15名(中1名は透析専任)]

あずみ野の四季より

- (1) 春はまだかと振り向き見れば  
北アルプスはまだ雪景色  
ワサビの花が白く咲く頃  
雪どけ水の瀬音も高く  
あずみ野あずみ野やがて春



---

## 北から南から

---

### 大津赤十字病院(滋賀県)

加藤 友三郎

東海道・北陸方面から京都への交通の要衝として又四季を通じて風光明媚な琵琶湖、それをとりまく山々にとけこむ自然環境に恵まれた大津市の中央に位置したところに大津赤十字病院があります。赤十字の病院の中でも歴史は古く三番目に創立され、永年の変遷をたどり現在では外来患者1日平均1,800人と県内最大の病床数909床(一般852床・精神病棟57床)、診療科目23科と救命救急センター・新生児救急医療センター・厚生省臨床研修指定病院・滋賀医科大学関連教育病院・日本内科学会認定内科専門医教育病院をはじめ22の学会認定施設で滋賀県の基幹病院です。

敷地面積23,665㎡・建築延面積53,000㎡、職員約1,050名が心温まる地域医療をめざし頑張っています。

検査部は病院の歴史とともに、戦後の医療の変革の中で逸速く中央検査室制度(1954年)が導入され、細菌・血清・生化学・血液・病理・生理・一般検査と技師法制定により、臨床医師と共に検査部の基礎が築かれました。

医療技術の進歩と共に医療設備も並行して改善増設され、1970年(昭和45年)には救急センター開設に伴い、全国に先駆け24時間体制(日当直制)を確立し、救急医療に貢献して来ました。

1990年(平成2年)に検査部から病理が独

立し、病理部ができ、部長(医師)・技師5名・助手1名のスタッフで解剖をはじめ病理検査に励んでいます。

現在の検査部は部長(医師)と4課・9係、総員31名の技師と受付1名・洗浄1.5名のスタッフで、一号病棟1階に位置し、中央廊下を境にして東側に検体部門約750㎡(床面積)のワンフロアー制をとり、その一部を24時間コーナーにして緊急検査(30分以内)の対応をしております。西側に生理部門約210㎡(床面積)また、外来棟に外来検査コーナーを設け(検尿・血糖・心電図)を3名のスタッフを送り患者サービスめざし頑張っております。

今年度は特に大腸菌O-157の集団食中毒の影響による便培養をはじめペロ毒素検出のCPR法の取り組みなど大変な夏でしたが、今後も時の医療状況・医療発展に応じた新しい検査を積極的に導入をめざし、臨床医をはじめ臨床に携わる看護婦など関係部門の信頼をめざし、一同頑張っております。



---

## 北から南から

---

### 広島赤十字・原爆病院(広島県)

花田 薫

広島市は古くは安芸の国と呼ばれ、太田川による三角州に城下町として発展しました。現在でも橋の多い街で当院の職員の大半は一つ、二つの橋を渡って通勤しています。戦前、戦中は軍都として栄えた時期もありましたが、昭和20年8月6日に原子爆弾の投下を受けてから広島市は人類史上初めて、原子爆弾の被害を受けた都市として長崎市と共に世界的に知られた街となっています。毎年8月6日には平和祈念式典が平和公園で催されており、広島赤十字・原爆病院でも院内の慰霊碑前で8時15分には黙祷が行われています。

また近く日本三景の一つである宮島が在り、平和公園の周辺とともに観光客でにぎわっています。

本院は広島市の中心に近く、周辺には県立・市立・大学病院などの他に中小の病院が多数存在しています。

昭和63年4月より赤十字病院と原爆病院とが合併して病床数714、診療科17の総合病院、赤十字・原爆病院として新たなスタートを始めたところです。

検査部長は呼吸器科部長の兼務で、技師は29名で平均年齢36才となっています。検査部は4課6係で一般検査係・微生物係・免疫血清係・血液係・生化学係、そして生理検査係より構成されています。又、検査部とは別に病理部があり部長以下、医師1名・技師6名で構成されています。コンピュータシステムはNECが採用され、一般検査係・免疫血清係・血液係・生化学係の部門がオンライン化されており、病院のホストと接続されています。生理・微生物検査は病院ホストとの接続だけでオンライン化はされていません。

昨今の厳しい医療環境のなかでも検査部は業務改善を厳しく求められる環境に置かれており、その実現にむけて日々検査部全体で努力を重ねています。





---

## 北から南から

---

### 高知赤十字病院(高知県)

溝 淵 功

南国土佐といえば、青い空、青い海と、坂本竜馬で知られているが、台風銀座としても有名である。高知赤十字病院は高知県のほぼ中央、高知市の北部にあるJR高知駅の近くにありま

す。高知赤十字病院は、昭和3年8月、日本赤十字社高知支部療院として発足、昭和18年1月より高知赤十字病院と改称し今日に至っております。創立以来、人道・博愛の赤十字精神を基に、医療機能の充実・看護の質の向上・保健衛生にかかわる社会活動などに力を入れ、地域の皆様から愛され親しまれ信頼される病院づくりへと努力をしているところです。平成6年11月10日より、赤十字事業の一つの柱である災害救護(医療救護)の考え方から、心疾患・脳疾患・熱傷・交通事故・災害などを中心とした重篤な救急患者、つまり緊急に治療を行わないと生命の危機にかかわる患者さんを救うための第3次救命救急施設として、高知県の認可を受け、救命救急センターがスタートした。救命救急センターの増設により南館の増設を行い、病床数482床で、各診療科(19)、人工透析、検診センター、特殊疾患外来等の診療体制で1日約1,200名の外来患者に職員577名で対応しております。緊急検査室も、血液ガス分析装置・血液凝固測定

装置・生化学自動分析装置・血球計数器など、緊急検査として考えられる機器を整備して、24時間体制(日直・宿直)で対応に当たっており、我々技師の存在感も認められてきたような気がしています。

検査部の構成は、生化学検査係5名、血液・一般検査係6名、病理・細胞診検査係3名、病理医師1名(部長)、細菌検査係2名、血清検査係2名(時間内緊急検査担当)、生理検査係2名、洗浄係1名、計22名で業務に当たっております。

ブランチ化により病院検査室不要論まで言われているきびしい医療環境の中の検査部門ですが、迅速検査体制・緊急検査室等患者サイドにたった検査業務を積極的に推進し、医療チームの一員として存在価値を高めると共に努力していかなければならないと思っています。



## 北から南から

### 前橋赤十字病院検査部(群馬県)

早川清也

県庁所在地である前橋市は、平成4年市政施行100周年を迎えた。「水と緑と詩の街」をメインフレーズにしているように、街の真中を水量誇る広瀬川が流れ、緑豊かで、落ち着いた町並は私たちの自慢とするところである。映画「眠る男」で、再び時の人となった小栗康平監督はこの前橋の出身、実家も当院のすぐ近くである。

さて、当院の創設であるが、大正2年4月に遡る。当時の町名は“新町”と呼ばれ、確保された一万坪の敷地は、広々とした田畑や松林に囲まれていたという。欧風で瀟洒な二階建ての新病院は、5科80床でのスタートであった。内科・外科・産婦人科・眼科・耳鼻咽喉科の診療各科は、当時の最先端の医療を誇り、地域住民の期待を一身に集めた開設だった。

戦争中の混乱期、高崎陸軍・霞が浦海軍病院等呼称は変わったものの、以来80年余、地域の中核病院としてその役割を担ってきた。

検査部の設置は、昭和21年3月であるから相当に古い。経緯については明らかでないが、初代部長・故木島滋二博士の先見性に負うところが大きく、昭和23年には北関東で初めて「中央検査室」を名乗った。創設時、2名でのスタートであったが、昭和23年には、前会長の佐藤春枝氏が入職されている。

その後、昭和45年に新館建設と共に移転。さらに、平成6年9月、9階建ての新病棟竣工と共に現在位置に移転を完了した。

ベット数581床、一日平均外来患者数約1,400名、診療科は22科を数え、健診業務、

2次救急指定病院等、地域医療充実の一端を担っている。

検査部体制であるが、平成2年、病理部が独立したが、現在は常勤の病理部長が検査部長を兼務し、技師数32名、事務等3名の構成で日常業務にあたっている。

平成3年12月には、それまでのオンコール制から宿直制、翌年1月には日直制を導入し、夜間・休日等の緊急検査に対応している。

遅れていたシステム化は、平成4年に導入され、OCR伝票の使用により病棟の前日予約や採血管配布。オートリフトによる集配などの病棟支援。また、検査情報紙「ラボ・レター」の定期発行を行なっている。

今後の課題は沢山ある。輸血管理業務の導入や中央採血。臨床側とのコンタクトなど、より開かれた存在感のある検査部を目指している。

臨床検査を取り巻く状況が厳しいだけに、40年近く続く検査部カンファレンスをはじめ、たゆまざる自己研鑽と問題意識。初心を忘れず「いつでも、どこでも、誰からも信頼される検査部」を目標に努力を続けたいと考えている。

